六面畫行合五

尤大將家六百番歌合卷第五目錄

憲

初憲　恋憲
霞憲　初恋
遇憲　別恋
述憲　帰憲

雪憲　見憲
歌憲　待憲
弘憲　稀憲
旧憲

左大將家六百番歌合卷第五

戀

一番　左　持　初戀　女房

[illegible]我恋くさやたのうらん眺日をうく所地のあるうち

右　信定

今朝はまたをうくはりひさうの所地とあるを遣あやしきわの浪ぞ

右方申云左歌うくつゝ空しそいそ海かれ

左申云右方今朝はまたものをおもふとうう云ふほど遣

判云左歌うくつゝ殊可珍左歌のうをおもふとをいふ色

うすやうくつゝ思ひたなびくをおもふ袖をとそあるべきの

さ海ゆもあの番持うゝ侍へし

二番

左　勝　雲雀つ

りゝ来の波に袖うちぬらしまつ人の心ぞ知られける

右　経家つ

きくもをすきうきをしるを夫恋ゆゑ思ひ乱るめぬ恋もする哉

右方申云左歌を掲歌

左方申云右歌なりとも恋ゆゑ思ひ乱るめぬ恋もする哉

判云左乃初句れり来いひ初句をゝまても心をさゝし

右心詞なりゝなの歌て左勝歟くゝ侍めり

三番　左　持　定家朝臣

日を海を人の心に知られなくを恋ゝをするや身歟なゝ恋へゝ

右　家隆

いつゝゝゝ恋ふ心の以人を恋ゝをするや身歟なゝ恋へゝ

左右共に歌之由申

判云左右共首心詞を勝劣をこゝ

四番

左　勝　定家朝臣

なひゝかあ人れりゝか火焼うめて煙を恋ふくゆる恋ゆゑ

右　隆信朝臣

あれ物のひ人りる面に恋ふそ言きうぬゝ神をぬれけ恋

右申云左歌くゆる恋ふ人くゆる恋ハきく

なゝをひをうくゆらん事もいく

左方ノ云石文共其所の面を上にしうら書を世称之門を八番
もるるん勝と又書きうめうちをつく意を上人文う
判云石のうち其歌まくゆゆゆをうそいうめ右方中一条を
不可然如此詞字数面うりとくまうとくまうの此類
不可勝計事也只番すさ面乃若面そそへうう右ゆ
やはかせ勝ちのくもものやうはるる思ひしひうを不
可然事歟左のくゆゆを且ゆうも似宜可為勝也

五番

左　勝　弘昭

錦木のふかそへてうしとの歌も思うめ侍る文をみめらめ

右　鶴蓬

思ふうふうるれうる扶のれ波やうひのされうちたん

右方ノ云左番錦木は意をうひうそうあまえ
ふそうの勝事うう
左方陳云絵図の書うう勝ゆゆ錦木を忍ひそのみを侍くま
木也うう
左方ノ云右番五下ゆうめうかりふうりうさに
なれうう色うなひてもゆをそされうう立も為なとなく
てふうもふなくや
判云錦木なをいひつれを意はれ方事ゆうて例の歌ときこ
ゆうるやはをは二条殿如屏絵歌の奇心すあうをとまる
うるふ載条一不令八也件番裏ノ注之仍以錦木可為勝
裏書云とふうりいいしノ歌乃扶ゆ侍うう意乃ちう人歟
きれ文字の通ふいく行たうをひ給へし

六番　兼宗朝臣

左　持

忘るゝひのうとくなるゝ人やさなりぬれをかなしひまさるゝ

右　中宮權大夫

ひとゝめしる人のいやまさりにしかはしらひちの求れはまさらん

左方ハ文字ノ色ヲ思ヒ合ル由申之

判云両首共ニ勝劣ナシトナリ

七番　忠意

左　勝　女房

ゆくすゑよ雲ゐの月の初時雨ふれとくもりの空のそらも

右　中宮權大夫

園のうちを波ハ雨よ打そゝてくもりの月ハ雲ゐ晴れつゝ

右方ハ云左歌ヲ不可勝

左方ハ云右ハ首尾不相應ヲ以ふしもいく

判云左ハ雲ゐの空の初時雨ふれりしをみし侍ル可為勝

八番

左　勝　道宗朝臣

人ゝ思ぬ思ひを物のくうむ連ヲ出ぬそ思なるたり

右　經家卿

ゆくすゑのうふしてうとなくいはめん我ゆ外ハ人ハ

左ハ念仏ノ福之思ヲ付くゝ申之

判云左ハ右ハ方ハ詠出右ハ詠出ハ歌の成

よ侍めりさしし左ハ思ひ出ぬそなし優ハ

侍て勝へきなり

九番

左　勝　弘船

うきみをさはをりくつむ舟よりてくやゝ見も秋あき

右　家澄

笑るはくいをもぬ思ひのなくはあを人のつゝはをたゝぬ計の

右方ゝ云左舞を指事

左方同

判云はあ首方指いくゝをくの勝劣なけれとをいをぬをなく

はゝををはをいをを後悔もをの家とりへをいをゝ

ひゝあ見ゝ所をぬてゝ左可為勝

十番

左　指　雲澄

今ゝをゝはゝをあゝはゝのひゝををの海指ゝゝ人のゝひゝ

右　羅蓋

おりひせをひの在見為なゝハはのをゝ乃後も人ゝ叶ゝら

右方ゝ云左心あまをあゝりをゝを中をゝ正志を思ゝ終をん

左方ゝ云右思ひせくゝひれ在ホゝを思ふほをゝ為をを

思ひゝをぬあゝまゝこをれ

判云左方をを心あまをあゝむゝをみををををゝや右方又

ひ見ゝをゝのくゝを中をゝ侍ゝねを指をゝや為を為ゝん

十一番

左　指　定家朝臣

秋の夕みるめをををのたくひ水ゝ世ゝ人世く秋の下ゝ見をゝる

右　信定

我とを思ふ人うつくしく侍るなる神のトにまゐれ
左方中ト云左手に花を持て
右方ト云初文字きくに又山吹をうつす田中
判云左手上せく神といひ右乃ふれさわぐ神ハなを云
共に優なるさまを侍とをもひ出られて本花を
侍らん神を勝劣不分明歟

十二番　左　勝　五氣朝臣

ものひとくあの世にきうを思ふしと蕨ハ下すやをかぢうん
左　藤信朝臣
あくうあくしのれの床よりあてあやむとうるれ愛しみめん
左右共に本句不思之由中

判云歌首ハ姿詞共よろしくみし侍るを左ハ後を思ふを
なくあくうあくしやの下にうをて侍るをうん左蕨ハ
下すやなを云ハ心ハうをん似よをしし勝と為人し

十三番　左　持　安憲　零遍つ

髪あるあるひみて後うをうあくへさ遍つ山まの氣分敗ともも
右　中宮權大夫
人ハてふなたの心と侍くを人をへを意ハあなうハくやーのはし
右方ト云左を持歟
左方ト云左手下にをうふをしくや
判云左方髪あるうハなををりう可宜すやと思侍ふろ持歟
本句事後くひすくなを侍るやを右手為意ハあなうん

海とみひはくてをゝきなのおくへし五勝勢号四

十四番

左　勝　弘昭

ちはやふる神代もきかず龍田川　八重をなのり中川の水

右　家澄

ちはやふる神代もきかず龍田川　からくれなゐに水くくるとは

たゝ花を念之由申侍

判云　首江川湖海の秀句とも申つべき歟

とみるもなくめをなくて神ぬらせとやさりへたるを

ゆうふの縁ゆゑ中川の水をまさきくやあらん

十五番

左　持　道宗朝臣

いくりと思ひいるものあるさ海を経る人まそなつ[illegible]

右　信朝臣

右申云　左方申云　右詞不似歌所

左方申云　右歌ひとへに後鳥の事也

判云　左方詞よ歌の事也

なるうやとみし侍と出もの人を拜をのこさんあさうく

やはうふ縁を以の侍るなのめ不侍らん二首共體事

の外に依遠をの詠を示すを為なるべし

十六番

左　勝　五条為信朝臣

ゆふ[illegible]なる詠所の姿も高よ[illegible]

右　信定

康の祢宜なるたくふ錦はなるをもちうるをもの八ぬれ
左を念也　云くは祢ぎとくはく病れ
判云左は左を番に勝を優よ侍と左番を病之四一を後者

左可勝まやはらん

十七番　左　勝　女房

若姫のことをかうふ人をきくの家のれぬ扶よなにをかたらん
右　経家卿

きくを枝のくもにはくれにきくのらけいひ出ぬるちの神うぬれる
左方中云左番に五勝
左方中云右菊花をうの世せんとをたてまつるもいひ出ぬ者

乃番うるを
判云左は菊右番花をにことをうるをれて一をこそをやをと
侍めまとをなを菊はれ祢のれぬたりとよなを云れをうる
今すあ一優うり侍すや

十八番　左　持　芝系朝臣

唐のみををうぬるの人をうるをのうをの思ふ
右　羅蓮

いふしてなをを神うり侍ををふらんををみぬ里は萩乃上う殺
右方中云左番をうるを侍字うれのをを
左方中云右を侍難侍優まるをみぬ里は萩ををうるくや
判云を侍あ一のうんををうぬ世と云れ三史八代史ふるの受

然共古歌ハことゝいへれすや事ありなまてしきせれ爲
すれにやまさみぬ里の秋なれハいふかしてなとかそふらん
とこそれかよう是侍らめ但花をも淺あしまて思ひおきて
侍りまはたちらむをそ捨かすや侍らん

十九番　見戀

左　重家朝臣

中々にみるめ計をかことにて此井まあふみの海とたのめよ

右　勝　經家朝臣

いまは火の影の見てしより衣てに残るハ涙乃よをぬ日ろうす

左右共にやさしくきこえなりたるを右方人申之
判者申云わりなくされとも方人申云此条めつらしとも
云詞ふもめつらしぬ歟共ゆりをめつらしハ常事すや

よしたのめあふみの海とたのめとなるをみるめかき見
ゆき及ぶにやおなしかるへきともよめれのしかれと
いさ見えよ此にまさるへくや

廿番

左　持　季經朝臣

きのふやけふもなきたまの花のまよまさるはなくさむ習ひ成をと

右　中宮権大夫

又うち払ふつゆけき身をみてもおもかけの色らるれ哉と

左右共無難之由申之
判云花来句思ひ成をとと云れてしたる事は遠て思ひ侍ゆく
左つゆきなきの見うりもらん歌ハふみし侍り乃風経
乃事ともおかしかるへし

廿一番　　為家卿

左

みそのあまの手足をあらはせるゆへにふかき人を思ひ出の妙相の人

右　勝　　信定

みるをけふ中にはそうくるまれ面影のをなるへくふるとも

右方中云左歌可弟又牡丹

左方中云右歌上又七夕もふるとやや

判云左を伊勢物語と思へれなりてしたきみれ世ふと云れ

とかへ人きくふるややをしと云るハ云れ

為の詞やくしし歌ハ心ひときくりの事あ様ハ為

世歌をうくまされるるや為ら歌

廿二　　左　拍　　弘昭

妹の為蓮後ふ海みるのくふるもみぬれまさ恵ら

右　　家澄

野りひとの海の称をうをつこてふひの近をひのておさん

左右共歌之由中

判云左歌小白さけらの

ふてれてくくすと為恵右芹恵むゆへあるれをかた

ふ為へをむの近をなくくれるくすめくむら

しまされとを歌中みる為

廿三番　　左　拍　　高倉朝臣

うつしあさのゆのまれおよのをゆ為ふ海丸恵を拍をて

右

[illegible]の池の水を[illegible]の池のほとりに[illegible]

右方中一云心之由

判云花ゆきかの池の水にうつる花を右とする[illegible]

仍優劣詞は侍るべし初かうしつゝしをけり題書かと

[illegible]も侍るべし今合はせ[illegible]とかの持はべるや侍らん

をかの池のそこに鶴[illegible]侍りけるときこしめし池の

[illegible]なく侍るさかきるかいふも又勝劣をえずや侍らん

[illegible]

左　勝

[illegible]

右　　女房

[illegible]

後法朝臣

[illegible]のいろ[illegible]心を山さくらの[illegible]と思ひうめて[illegible]

右方中一云花[illegible]たそ[illegible]時をたゝかはしとそ[illegible]いとん

[illegible]

花のゆゑ云花[illegible]山[illegible]といふ[illegible]を思ひてゝ[illegible]

[illegible]その袖をえずや

判云花[illegible]心を[illegible]なくとも[illegible]

[illegible]右方[illegible]侍りて侍なる[illegible]したをはすれをよ[illegible]

[illegible]ものなるひいてられて[illegible]

[illegible]まさ[illegible]やらん

[illegible]五番　　[illegible]

左　持　　[illegible]家朝臣

[illegible]の又[illegible]

右　中宮権大夫

霧さえてあさぢが原のしのぶくさ　いとゞしくこそ思ひそへつる

左　左衛門督

判云二首共よろしとあやまるこそ勇ましかめ

廿六番

左　勝　兼宗朝臣

ふるもまた色ぬるうらのとをたりふ　霜ゆゑ　ひけ　ひなびひろ

左　経家卿

今数ひへさくやうの色ぬるうらゆへよなを見ー人なるなくみ

左　左衛門督

判云右歌戴安倍常事　歌しかるべし

廿七番

左　指　弘昭

見てもあるものをそうらやまさるるひはくすかいきの松のうら

右　家澄

紅のうらん琴のをとをあるしくれのみ　野人　ゆゑひのるぬ

左　左衛門督

判云左歌全会之由

右　秀匂　いみ　ぬ　つ　れて　侍　左

判云左歌　清而　秀匂　いみ　ぬ　つ　れて　侍　左

野へ　ぬ　ゆ　ひ　ゆく　色　なき　後　よ　侍　て　葉　表　匂　ぬ　外　し

なるあく　詠　侍　指　て　を　し

廿八番

左　勝　季通卿

紅のたるーを松をこ梅ぬやゆ　ひ　ぬ　ぬ　ぬ　ひ　し　ぬ　ぬ　を

右　羅道

三稲の山松五門とゝへやふたのめぬるゝ逢ふらるれ
左右せう那不見之巻
判云あ方は三稲山左そいの門うるはしきとあさん事は
却くやたハ松五門とゝへ所の詞とたゝ巻
左なと事さ後優なるすやゆらん

廿九番

左　持　　女房

為ひろ道ゝこゝひをみけふゝ松乃こすゑれまの浦
右　　信定

あゝ逢ゝそ行末もたゝね三稲の山松れ持乃ゆふれ乃そゝ
左右せやゝ五類之巻
判云左の松乃こすゑれまの月とゝひたの松乃こすゑれ
夕暮れとゝ云れせおいとれゝくも行れたを三稲れ
山を行ゝ孫とも中ゝ行れゝくきこゆる所日の孫ゝ
さひてまさ所ともゝへゝ夕暮乃そゝ又おとれ
ねくも行らゆハなとおとやねくや

三十番

左　勝　　定家卿

行も新を却ゝ百ゝ先立てあゝ奴風乃松ゝゆくゝ
右　　源信朝臣

為ゆれハ行めやをゝ夫さ行ゝの袖乃上ゆ
左右共やゝ那之由
判云あ首らゆ優ゝ為と所来白松ゝ行ゝ持ゝ行左
一番　　初戀

左　持　　藤原朝臣

今をかぎりと思ひのこすことのはもあれば神かぜのせん

右　　經家卿

をぢらひ今ハなさけをんみあるもとに独の思ひもとゝそ

右方　云ひこそ奴僕やしなれなれてハおのれよまれ

ちの不毒也意の所内こなたそとくしあるて

求させれるなし

左方云みこそりハも法意相違之事也行事ゆゑ

判云花意の所つこなれもろ意表方は帰せよ可被賞之所存

あくまれすや勝劣分ぬるよ不覚悟ゆ相とゆ色くや

二番　　兼宗朝臣

左　持

いさらこそ世間の森ゝ初みん所ゝまゝらひハやをひを

右　　中宮權大夫

あくまきも思ひもやをゝ我意をなけきのりをハ初ゆらん

左花世殊要方号

判云花寄いさらハなこそれ〻さ程なるハし右云を

世分ゝをき所也唯すゝれ又持とゝ人し

三番

左　勝　　雪道卿

ゝゝん契ゝをゝをゝ初ゝもひと数の程も初をたのまん

右　　藤信朝臣

初さゝと部ゝちゝ入れ方成ゆゝつゝんをゝ今を初ゝめ

右方云花寄ゝゝ意れ無可申ゝ意

左方ハ云々番ハ心の内にうつりぬる人ハ初文字耳にて
判あるべく後にて事にあたれども
判云左方人ハ云々あつまりまゐせるまやたの云ゆくえ
と不詳の樣にて事迹と勝とハ聖ほにしう

四番

左　弘昭

ふ川やを紙小河よりいくたびとなく秋ふかきのせつ

右　勝　信定

思ひしるそのこのかゆふかぜ恵しうわくまこもの入の月

左方ハ無題之思歌ハ
判云左のうさいくたびとなくおくてとくくしくを伯迹
と歌自ほ秋にまの世つと云れまほひなくやさきあらん

五番

左　勝

完和尚

年ちかぬ行末ちかき堺山ほよりはたそのゆふれ

右　家澄

持ちかく神のたのハ世歌ハやハとうたの森れたあるて

左方ハ無題之由ハ
判云歌首共風所をよろしきをみし伯と左をあく後にこのし
詞よくハなくぬるやたをくらてて神ぞそ社ハ三あ
るて左方ハ一ちをいふへをつの神ぞとせるまや
森ハたのるてあるこらハやさあを伯らんをのへれる
ままあくや

左番ハ勝と定へし

六番

左　勝　　女房

いく歌ひまに成るとかいまて出て出舟川神社まうちれをのかりふら舞

右　　舞蓮

出舟川ちくぜの宿もかりとぬぬれり神社すをとなのみて

左舞　右方殊中　宜之由

右舞　左方不弱

判云左右のさま孫川せふ優まみし侍とたれ来とたのを

てと云ちてちちちちたの神まうちれ殿とふらんとい

白ちとしれよ成しく宮とを侍まや左勝とすへ

七番　　歎憲

左　勝　　弘昭

ちちやちの契をむ殿ふ搗をなくやとさしぬ

右　　経家つ

なのむちよ塚社会をつけつれもあのことのもうをきふまれ

右舞中云左舞不能流芸之詞ありさあり

左方殊勝中与

判云左方かちやさをあふと云左雖不被厳重上白を優ま

侍て左舞しちちちれ会とかくふとを事ふ侍め

是仕りちち支搗ちちまさくくや

八番

左　勝　　兼宗朝臣

行末をあひみて後やちちれへ丸をふハをはとちきちちわそ

右　　中宮権大夫

まそといひしを云の歌にのてこそ侍るなれ今も清めと紙を遣
左勝　左方殊中与号す
右方殊中　きくなれしうら思中
判云左ことなる事を侍る歟といへすあ中おとなしくは
侍るや勝負くや

九番

左　季通つ
物のことに付歌なりんと思へとも琴の音を聞をかさけるこそ
右　寂蓮
新しき人を志ちの八雲稚のことのそを思ひ残れといそぬけう
左方中云左勝を合や
左方中云右方の志ちの八雲稚のことの歌詞くさそも歌を
判云左は志ちの八雲稚不可然歟よそ侍るを左の
歌詞をは物なくしりきまされと中侍るくや

十番

左　指　女房
いけらそをちらふを見をは侍ふ中をあ中をれ出をうれと称よ
右　後信朝臣
ことの葉よ行をとまるなの余かりん侍をを見ものをは
右方中云左殊勝中へきさるな
左方中云右勝不甲心
判云あ中ことのををとりひ志りをとまる歌の余なをは
ありをまなるを侍よ侍て中勝と中勝

十一番

左　　為兼卿

あちきなき後世をのみ念じ給へるものをとなのめなるよの事をなげめよ

右　勝　　信定

さしなげめたる人々の心ばせのまさるとのきねくしそハ又も脈め

左　　為兼卿

判云ためもきふしと云ふしをさもあるまじきなれやたとへ人を

人のいのりをとをりいとなをなげくさまをいのりいたるかる勝

十二番

左　勝　　為兼卿

為世卿思ふ所人々そうれしくそうれ契も世ふの事ハ

右　　家隆

そもなを人のあく後をもとめぬまこと契りへうと思ふ事ハ

左右中一号同前

判云左方ハ世数初の芳華のあを連添く侍へし右者一思ふ事

ハと云ふ所人の字無殆なるうるや左勝ぬ侍へし

十三番　　侍従

左　　弘昭

へ逢ハ思ふ侍ふ侍て八まされ

右　勝　　信定

ふひのゆをやすくをふくるハ此ハ上ハ

右方ハ左ハ心ハ侍ハ

ふるをうる侍ふ事ハ又ハ侍ハ

をとねうとの後二ハ侍ふ

左方ハ云々ハ左よりてきこゑ
判云いとあひの禄よりは鐘ゐあり　ひはお尚り右番那
々々わひしなく云詞をいひはなん時をよきく
たりかをしさを猶せきすくをふといひてをむくれし
うかへて事也来白れり　をさこ也以右為勝

十四番　左　勝　雲雀つ

つれかをしを振しまを且里なれを振ろ者を行まそのりきれ
右　中宮権大夫
今様ふう床うらうひ行のうれ用乃言ひへうれ　りを里
右方ハ云尼乃舞うを色ひてやうあり
左方不弱ハ

判云右れ人のあて振をりをふハ　ハ代字乃
あうハなるうまや尼舞振　ちを里なきをと
いをろよろしくきあを行尼の様なりし

十五番　左　勝　巫京朝臣

ちりひやれ仕ひのいくを色里我行人をれを汝のすらん
右　遊歌つ
さうをと思ひをれむるかひうれきこゑ猶のひをきん
尼右共を振事之由ハ
判云あひ仕うひあうをきこゑ右れきこゑ猶行の字
後をを尼大事ふうまみ西まを還似不云有哀り以尼為勝

十六番

左　勝　五家朝臣

かけまくのめも鏡を吉信て七四さひしき十山れをうあも

右　羅蓋

きふを又うえるまたのをううをきくも給をそやをを相撲ひの八

たたを不那中

判云左かけまくらをけうらうう七四さひ一文なと云て優

かなるや勝とをえし

十七番

左　勝　女房

ちをさふれ未来のおんのを色のうを相ふあの世かをまをく相の八

右　家澄

おをめをやたのをけうひのゆくれをうをのくうをれを優

左たをを中宜之由

判云首をうう部詞を優うなるにをうてたうをきふれ

おををよろうをゆをを給左の勝なるへし

十八番

左　指　定範朝臣

風あうれを恵のこ蓮池をみて深り数をれをれをつ四

右　澄清朝臣

こ四人を行うかこ四ん山れをの月を給出くを数深ををり

左右又中を那之也

判云左舞池うみてなを云れををををしくみし給を心

詞うれを相をや給らんを舞をを給うう町こたんなを

をんれを詞をあうをれてを歌をををを給をやををらへて

指とやすへくや

十九番　遇恋　雪道

左

逢夜をつゝ神をうれなうゝ今夜をつゝれのさ祢ぬるうれ

右　勝　経家

うゝもりる涙の袖をあらはゝ逢ゝ事を新まゝ神ゝ逢ゝ

左右ともに会之由

判云たゝつゝ神ハうゝふと云歌ゝ侍と下句あまつ

にゝのゝやゝらん新古拾ゝ侍勝劣なく侍と

涙のいろうゝはさて右のうちと可申歟

廿番　遇恋

左　持　　家房卿

ゝもなく物思ひをゝ逢ゝうゝ思ひの限を今夜ゝ

右　中宮權大夫

袖をまつあゝぬ袖ゆへ忘ゝふとゝいさめ人ゝ

忘ゝ中ゝ云左歌　左歌ゝ之外無指事

左方ゝ云忘ゝ家ゝ逢ゝ宮之外逢ゝ思ひあさし

判云物思ゝ思ゝ思ゝ逢ゝ今夜ゝ限なうゝん事

ゝ思ふゝうゝ侍ゝ侍ゝ忘れ云の意ゝ思ゝ侍ゝ

物思ゝ侍らん歌首ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ

廿一番

左　勝　道宗朝臣

ゝうあものゝ思ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ

左　家隆

志くしてのひとる枝をうまさるる人乃心はたゝ面乃ゝ所か
左右をはかりをかゝ
判云左方の歌とひきたる上まなくをみをゝ作り右方
事柄ハさらせみくゝ作りうん相ときこゝ所ゝをし
ともるめくくやた勝うん

廿二番

左　持　女房

ゝゝ衣のさとのゝ契くらをしてゝ枝乃つゝをうらふらん

右　隆信朝臣

枝をりさ初のゝを衣れうゝをてゝ乃つゝまをとゝを行るハるゝを
左右共を持歌之由ゝ
判云左方ハ作者之由ゝ

ゆのけふ作てし左衣ゝくゝ作ゝうゝ作ゝくゝまをとゝを思を
さらうん事ゝを絵も作歌等ゝ程同等ゝ作ゝし

廿三番

左　持　前大納言

ふゝまゝ衣作ゝ乃後のひゝるれかゝまをゝ思ひゝうゝひゝまをゝ

右　信定

逢みをゝをゝうゝとなひしゝをゝ乃衆ゝひのなゝをゝをゝをゝ非
右方ゝ云左歌ゝ初文字ゝるゝふゝをゝ
左方ゝ云ひゝ作ゝ乃ゝ作ゝるゝ
判云左歌ゝるれてゝなゝ絵ゝといるゝをゝ志のゝをゝをゝ
こゝひ歌ゝるゝと作ゝ作ゝる歌ゝ作ゝ乃ゝ絵ゝ相逢ゝ作ゝ
右歌ゝあゝ絵ゝ作ゝなゝをゝ作ゝゝゝゝゝゝ作ゝるゝ

あひだ、たゝかつと思しとのもやすあり、行ひかたく
侍らん左こふまーさとをはけるみ字ゝふうやあそ行
とはなとやーあくや

廿四番　左　勝　弘昭

志ぬうかうはけーさんしそたゝまたん逢ーよ合とうふとやしを

右　羅達

参うと逢ゝ山やうあつゝんはけーうぬかそはけく嫁ゆく
右あやこ云左の志ぬうかうはけーさいふとやさゝへ
左方孫やーらゝ
判云うれーさも因なゝんはけ志ぬそうるこやいそんはよ
不及れ持りゝぬかうれしく成りと云れようなもめる
とを侍ゝぬみゝゆくゝそて今後一段ハ事ゝよ行ハ是
侍らん左勝ゝ侍ゝ行ゝしし

廿五番　左　弘昭　右　勝　中宮權大夫　別窓

知ゝれをゝわをあやーく覚しとゝ所れそよ所井よ行ゝ志ゝ志ゝ
志れーしと契ゝゝるゝとゝ志ゝはゝそうそ一嫁ゝんーとうゝれーし
右方やーー云左ゝ別ひゝーのゝなゝを
左あやーー云ゝ逢ゝ
判云左ゝ井ゝゝなゝゝをたゝーやいゝんと思へゝ所ゝるゝ
井ー題ゝ中やゝ行不勝ゝ

廿六番

左　　季通

なにの我今物のゐなとなけのまゝ　ゆるほとなく善見なるハ

右　勝　　信定

志りなる今物はおう足ぢうれひうとはり　来の爰

左方　　左番　備後物心や頭不叶はゐ心や

左方　　左番　弟心物爰日なひてもやとを

判云　後物ものうと軽よそなをりすや但のひうと

乃りすゑ爰れうくみしゆりはたゐ勝

廿七番

左　勝　　定家卿

かりそれうく別ろゐの野人乃おれ食ひうふ猶をたもり

左　　經家卿

別路はあうきはをのとお坂乃をはとをなりはみはうは越うん

右方　　左番　詞ぢくの本すや

左方　　右番　を下めはうは生ゐ

判云　左番　上白は詞ぢくをきあうくもみをゆらは食う

ひとしかや方紫葉なくよをとへはめ連を孫うは不可発業

右を相坂のを後をうくを志りてみしゆ連はをとかはふ

なをいへは食ふむうふをおとうをやゆらん

廿八番

左　指　　五家朝臣

つれをなく無よ食はなうゐ色てはふやおよりをおへきうれ

右　　羅蓬

逢坂の思ひををとのをすなうてわうを志はをうめ服まる

右方ハ左番ハ左持

左方ハ左ハ方なりひとやうさきにくの志ろまを似たる

判云あの風流英雄俊成卿しはとをへ

廿九番

左　持　兼宗朝臣

四人〳〵只そくの人ふかも別ろ巻さかかー〳〵すや

右　隆信朝臣

巻こと又と打りひー狩のりにれさかをれはそいけれひやそせー

右方ハ左方の点を巻之外を指む

左方ハ左番を指るの

判云左を准外人い今恋歌の深さしし成志めー右を始ると

縛しそは離おの切なる事ー表せる是又同名かーて

を勝劣仍て為指

仇書

左　勝　女房

恋れー此頃をたのむ月のすゑをかそへて

右　家隆

風ふりハ袖よりのまんをふをふあまー名所の明さえ見をみよ

左番ハ右方を感氣

右ハ左の頭ハ宜之由

判云左ハうるハ中りは来とりそへ右方者よりの打

ふをかこみとをちの為首ハ部詞を優よ俗と右を言とさ

をりへれやまうかかをぬ俗よ俗ら左且を打ハ

をりるち首を相應せるすや孫をく仍以左為勝ハ裏書

云伊勢物語云忘るなよ程ハ雲井になりぬとも空行月の

めくりあふまて業平朝臣の歌ありされともさちの讃云々

拾遺抄云或云橘忠幹字也忠幹ハ長盛二男也延喜人也時

不審業平ハ元慶四庚子卒

一番　歌恋

左　　季経

ちにあまる歌を中々よみなからなり人のことの葉かけさそれそ

右　勝　　経家

みさこ井る磯の松かね波よけて歌まくらける忘らるまし

右方申云よわるとはなりこそ

左方申云目立なれと又

判云右歌ノみつめれよりとまるにまさるを以ノ

たかるとまた歌ノめのとやなり給ふをやちらん

二番

左　勝　　通宗朝臣

わしりぬし扶きをやく掃きて道を涙にぬかしきれにきる

右　　家隆

もののふのひろしのひとと今を忌らまんそのへ人めに歎くかきるまて

右方申云左なりとやむるめり

左方申云はもし達んと云はこ道ゆくさても申ことを

判云左めつらしくきこえ歌ノさまきこえ尚時

歌ノ指も優なりとも左為勝

三番

左　持　　定家朝臣

池の上にひろ波のしら玉とちくまの八ようせるを見らめ

信定

右

うしはくをつてのさめるゆれ衣の恨に打ろ書もあるちん

右方ドこゝろをとり人所人の事をあやゆ

左方ー右番ーを見て心をよ

判云左人て来句不被其心うやを浦を優に侍と哀うを

あ心ひきぬ様ゝを侍てしかをらんて相とヤ色くゞ

三番

左

定氣朝臣

うはくを今を思をて忘をうん思ふ海ひにふもたて

右 持

中宮権大夫

えこふと人ゆををきぬふしてあをゆうを必と分をてまん

左方ー云左方ハ法自心ゆうす

左方ー云左番ー心ゆうめー

判云左番ー哀ふ心ゆをてを受侍ぬすやをれうををきぬ

あらめー四ハ侍を又を哀詞うんすうををうしを事

ふ侍ゆやをきぬをひ中侍てし

四番

左

弘昭

我をををみるのぬれせをよみうて袖ふを秋ふのうをれみるを

右 勝

隆信朝臣

人をきぬ心ひ中ふ深しを哀をちををにはれをれをうを

左方ー哀

判云左袖ふ外ふ中をすあーをみうをうやをらん

ふたちたやかとろ町をゐらん

六番

左　勝　女房

神の波ひ[illegible]ふ[illegible]を経もみよ[illegible]ろうさ[illegible]れ[illegible]うえのき

右　羅蓋

うやうゝ以人して今を振[illegible]れたるのひ[illegible]程乃あ[illegible]後世よりを

右方ハ云花筆ハ[illegible]を指[illegible]

花方ハ云新眼人のあ[illegible]ゆをゐ[illegible]を乃ひさ[illegible]を

判云右筆上句をよろ[illegible]句を学[illegible]ゆ程のかゐ[illegible]しきやめ[illegible]

小倉ゝ[illegible]右筆花方乃歌もお尚之上を[illegible]を因歌異なる

事[illegible]以花ゐ勝

七番　猫　恋

左　持　歌昭

町さらひ[illegible]町の恋つ[illegible]や郭云[illegible]ゆ[illegible]の山ゝ[illegible]れ[illegible]のめく

右　信定

後[illegible]そぬ[illegible]さけの山ゝ[illegible]云清て[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ひ乃そ[illegible]

右方ハ云雖[illegible]殊歌不被[illegible]

花方ハ云なさ[illegible]花山年[illegible]し

判云[illegible]ゆ[illegible]の山の郭云[illegible]さけの山花縁[illegible]

八番

左　勝　五家朝臣

[illegible]川秋の七日[illegible]なの[illegible]

右　家澄

[illegible]の契[illegible]を七夕の[illegible]花[illegible]ゆ[illegible]

左右共にのるめさてを指事之由とて
判云左歌よろしくこそ侍めれ勝とをして

九番

左　指　雪遊び

をれぬるこゝろぬる情を忘られてはりつゝ歩を形やをする

右　鞠蹴

今をこゝろ思ひのるそあをを思ひたる忘れこそ鞠をかの終をと
右申云左歌なにのこゝろへ
左方申云心はのこゝろ面しに侍ると
判云左の級ぬ情を思ひ出る歌侍同なる侍しなとを勝

十番

左　女房

ひつ〻の袖はうつりの清をて〻又逢をのこゝろみふなす
右　勝　中宮權大夫
うゑをこゝぬふさけをるこゝををこゝ思ひ侍の逢しそうゑ
右申云うつりのをる思ひんといをん事ゝ
左方申云こゝをといひをそをるよをくや
判云左歌うつり香もをこゝんの那は不及ゝやまを逢を
のこゝをふをををひををこゝをこゝをこゝをこゝをこゝをも
を会をみし侍あつ〻歌をこゝをして左勝侍らん

十一番

左　定氣朝臣
年うりのこゝる歌をくをこゝのをこゝをこゝをこゝをこゝを思
右　勝　經家卿

心さし深かるべきの旦すれあひの侍るとよ打りひ出た
左方申云我もまれ名の者のと侍くあるべき程いく
右方申云右勝申めり
判云右の歌申詞はみよう右長水はひ合を
うと侍はしはらく申れと老耄ノ目さして是を侍るを
叩ゆることなくを勝ノ侍へ皆以左勝とを

十二番　左　勝　道京為長

詠よ又ゆ代ゆ一歌のよのうれしてちとうふ我と思ひ出らん

右　隆信朝臣

つく狂ゆ侍ノ歌すくをを力ハ一歌とふもはしうみうん
左右共を指歌之由とを申

判云左勝詞優ゆ侍を我とやすあ〳〵うふ侍らん右
勝申はゆ〳〵ゆ〳〵ゆんとをいんれみゆ侍らん左為
ゆなく思人ゆ心なを勝負くや

十三番　左　勝　女房

絶戀

ひすゆひよ出ゆ人のあひひちを侍ゆ文世余とをふをみる歌

右　隆信朝臣

ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ以ゆをといひ〳〵暁をやそ侍ゆとれ云の宗をとを
右方申云又文字よやをゆらひふをといを侍ゆのなく撥や
左方申云を指歌
判云左ゆをとゆらひふとをはゆん係ゆをとをいくいふうの
侍ゆん初又文字いゆんゆ侍事をものをみをいく

つゆとくだけの色の色又文字ばかりのこしてゆきたる事れうを
さへつゝみ方のうさ屋にまとまりて又ゆくしたの歌をよりて不見くさ四
花なき野辺なれと云れよろしくみをゆかり勝と可申

十四番

左　勝　季通卿

恋ゆへそのいけ色のうらめをうらめを後のあく後成りの

右　通家卿

行かたのうしろ見られぬる我身うや人ゆてをもいうしをへき

歌不記

判云左歌一切を聞遠由をやはらんた歌優うし

きあをゆかりと長くくや

十五番

左　勝　五家朝臣

ひとくをもすゝ山の峰のはてもなれ秋のうををれ松ををぬを

右　家澄

あさまやゆ月とせくゆゆ山ゆ来をかをくゆ狩をみをを

ゆあ中云秋松て八をををぬ松をやきををらん

花方ゆ云月とせくゆれひかゆ

判云秋松てをををあとをををあゆををゆ風ゆををゆ人云

ゆををて左月とせくゆれハあゆをやを来白ををををを松

をゆををゆ花をよろをゆ[illegible]かゆちとを長し

十六番

左　持　兼宗朝臣

さらをを空をゆし月日ををれををや紅をゆゆ紅をらん

九

いたこそうらくるとり元なりんゆへ文程の奥とやを
共ゝ指事之由や
判云返方れひしこし柔同絡る指て可為指れ

十七番　左　弘昭

うゑ風れ移風をうこをけ今更る注みひのまてみしぬるうん
右　勝　信定

さもやの後を思し中ひ物ても海てらと駄くめれいをけ
左ひを不新や
判云左れ移風をうこをけ恵南なきれあるうれまやくめれ
岩搗うゑ柔うむひち指うんの

十八番　左　指　定氣朝臣

ひひ人又ゝて人うるとてハ行の名指ゆめれかうひ海
右　鶴蓬
おりひ俗あを思いくより指の戸をたりといて月をこれ
左不せうあるうぬしぬるゝ
判云左の爰れ西路右乃まれの戸ゝ月をんゝうむとに
俊まや指とゝ人くや

十九番　左　恨懲　弘昭

引ゑてあるれ氣文をたゝをれこ海くと拡振のをうれ
右　勝　陰信朝臣

おもひやる秋は野もせのまくず原いかにまつらんその枝をかれん

右方申云左哥ゆくしかるやさしこそく不庶幾

左方申云始るの句無甚

判云めつらしきこたりと風情は猶可庶幾哉まくずはら

野もせなとあるのはくもめつらしけれと末句は優なり依て

みたるとまて勝ならん

廿番

左　　　　　　季経卿

あさまほやけふたと恨の袖ひぬらん恋そろうまとも数へてみかと

右　勝　　　　中宮権大夫

おりひまや海人もすれ恋路より深き恨りおまさらんとを

右方申云左哥無念哉争

左方申云何不知れるよ歌

判云左恋の字あさましやおりひまやもなし殊勝にして

左も字をなられは右は意殊なり幼少にや侍らん右の

おまさ川を恋渡ればまさ侍るのに以右為勝

廿一番

左　勝　　　　女房

泣きれそてもみるめなきおまさおの袖と恨るれさしもそ人

右　　　　　　隆家卿

恋ゆへに涙の河にゆられはし身はうきしとも成ぬそ縁とや

右方申云初文字似ゆのみす

左方申云右一文字まさし似雅のみす

判云初文字似ゆのあなめことなけるを身をば流くしそおちなりける

おもしろかりける事ゆゑ侍るべきにこそ
ありけれとこそ侍りしかれ左勝負くや

廿二番

左　持　　定家朝臣

うららん後の世までと思てもその面影を思ひ出るかな

右　　寂蓮

たてもたれむしやりのうんうみをるかへうめ一丈引
右ゆゑ云うとまる〻不甚心
左方申云云云云云云云云云云云云云云云云
判云云云云云云云云云云云云云云云云云
うと後鳥羽もいとゝ思ひ給ふやうなれもいふやうやきあくに侍るやたの
おしらんもおもしろかりけるなといふへきやうにてもなとあり

廿三番

左　勝　　道家朝臣

分れうさをとふよりぬ世なれは是をこそ恨やはみん

右　　家隆

いはをきまくに我も仏やうこそ思ひられ定家人のうらめしれれ
左方申云云云云云云云云云云云云云云云
判云云云云云云云云云云云云云云云云
いはをとしの人のうらめしきのれ五十れようせうなくて
左　　五家朝臣

廿四番

きてこそうさをやをつまもすれをなれあるうせをうちなめて

右勝　信定

猶たりふじ代ゆふさくれ後手の糸引ひかるなり

右申ス云　左ハ是拍子

左方ト云右為事之上後千世

判云左舞あをけあかうを色しかるべと云舞思ひ

出られ侍をやをつくさなく云れも優よをなへし但

うれ字ハ上下ハ侍るを舞後くをうの原ハ引ひかるや

れ下ハそをそ侍めを侍ハ後千世をうのはやみの共う

よろしくを侍をと左ハ左まうの侍を度心右勝とすへし

廿五番　旧窓　女房

左　勝

すををまをといひしいるのふあさち色音も我ハを持やをそうん

ハのくをも年あらはををくをの侍をなくし我志し持ちををを

たりひよ不軽や　羅漢

判云なく我志乃云れをうの原をも我ハのと云れをよろしを

きをあれまや左勝侍らうん

廿六番　左　持　季通

つれかさのひなのはをひかの色て後如琴ちと思ハまうを

右　中将撞大夫

つれなさもふれうをかを年をへひなのはをのうをさうをと

右申ス云左舞殿下乃沸祢ろ下ハをををを

左方ト云つれかさひなすのさてをうをや

判云右筆面不代さの字ばかりおいたりきこゑ左筆又
勝負にてこうるとあるべし仍不審加題判

廿七番

左　　弘昭

我中と思ふの道四とおもてこ浦まゆきあひ乃且せ所く所色

右　勝　　家澄

山姫のみ雪ふしかりる若水や年ゆく恵のなみるなるらん
世不新

判云左仏面ぞかりひたをれ色を白と左ハ下白いみく
取りくやしの事ハ右の為ハ下りる勝とをくや

廿八番

左　持　　家俊卿

つのぶつ〻よ〻のむくひ乃つ〻さ〻て世年月ハよりさ所色

右　　藤信朝臣

年色ハ〻つ〻ハ〻ふたへてゆ〻ふと雪まんハ〻人〻今世長色
右方ハ云よりハ〻ハ所ハらんハ云ハ所ハとりてむゆのす
左方ハ云ハ勝

判云左ハ下白ぞよろしくみを白と上白ハつ〻ハ〻の世よさ
あ所ぞに雪しの世ハ右ハ雪の又雪まんハ〻人〻今年ハと
云ふ所白あ雪ハ成勝ハ又よく白ゆるや所勝勝と才ヤや

廿九番

左　勝　　為宗朝臣

今ぞよ〻ゆ〻よ〻ぞにてゆ〻ぞ恵も我ゆ〻ぞをゆ〻まゆ〻
右　　経家卿

右の人々当座に成かまうきふたへ[illegible]
右方ハ云もなれまりのうちあさをなれらを
左方ハ云太平きくふきまさる山ちを
判云左のさをれ迷ふをいうふをれ迷ふるみついをも
ちゝぬ詞よ侍りいふもよろしうぬるまやをし
太成ふまりなるをハなく上下ろ侍迷病氣侍るやを
河座なるゝ四へをにて侍めを迷

九番

左　持　五家朝臣

四の迷を四るゝ岩の小藻ふ藻ゝ秋り成ろ　おこか迷をぬ

右　信定

迷ろめりあゝ沈をいの四ういそのうを部の枯くれ夕暮の也

右方ハ云きぬとうをそふちいふうやきこを
左方ハ云部の枯くれ不尚ふ侍るまや左ゆるゆゝ
判云あのほうひれた左乃部せる不尚ふ侍るまや左ゆるゆゝ
みちれ小藻藻といひをきていく秋り成ろ　つを　こかれ
きぬをそをとれよろしやをそをきそを侍迷太いうのうを
ぬをを丈て部の枯くとりいへ枯毎侍りなくやを侍をらを
愚老の尋れをもむを成らゝぬふろう侍めれくら
四へくもまりの也成ろ　きれいをあをれる侍事や
をしを丈指とをみして侍る

左六將家六百番歌合卷第五終

110X
355
8